Institute for Global Education and Culture News

教育総研ニュース

発行：一般財団法人　教育文化総合研究所
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2　日本教育会館内
TEL:03-3230-0564 FAX: 03-3222-5416 http://www.k-soken.gr.jp

No.60
2025.3.15 発行

わからないから学び合い、できないから支え合う

－教育と社会の原点－

菊地　栄治（教育総研所長・早稲田大学）

資本主義の終焉とともに巷には異様な光景が拡がっている。エコーチェンバーによってネット社会特有のフィルターバブルへと誘導され洗脳される人々、切り抜き動画で民主主義の劣化を加速させる人々、そして「闇バイト」に釣られ身バレを怖れて犯罪に手を染める若者たち…。「今だけ金だけ自分だけ」の金融資本主義の経済と「帝国」に盲従する国民国家の政治が結託し、先進テクノロジーを悪用しながら人々を分断し搾取する。生き急がされる大衆は、将来を見通せない労働へと囲い込まれる。つながりを失うことで起こる悲劇はもはや他人事ではない。

問題の根っこには、「わからないから学び合い、できないから支え合う」という人類史のあたりまえ（「教育と社会の原点」）を忘れ翻弄されている現実がある。「わかったつもりになる危険性」と隣り合わせのまま、だれしもが「できないことだらけであること」を忘れてしまう。この社会が多くのエッセンシャルワークによって支えられており、自然のおこぼれで生かされていることも…。この状態が「常態」ではなく「例外」だということに気づかなければならない。そんな時代だからこそ、つとめて日常の「外」に出てみたい。質のよい書物に触れるのもよいし、自分の思い上がりを冷ます「ケアの経験」をするのもよい。もちろん、「外」を経験するにはゆったり流れる時間感覚と「余白」にこだわることが必要だ。

「ふだん出遇わない人たちと上映会をしてみようか」と思い、昨年末にゼミ生たちに声をかけ自主上映会をやってみた。大学の教室に20代と60代以上の方々を中心に40余名が集まってくださった。映画は、『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』。主人公は「難治性のてんかんと知的障がい」があると医者から言われた奈緒ちゃん。「長くは生きられません」と告げられ、叔父の伊勢真一監督がアルバムを家族にプレゼントできればと始めた撮影は42年に及んだ。奈緒ちゃんを慈しみ育て育てられてきたお母さんの思いや表情、家族の風景だけではなく、近所の子どもたちやお母さんたちが立ち上げたグループホームの仲間たちとのかかわりが映し出される。

50年間の日常と現実。そして、いまも続く社会的矛盾の陰影。「こうあるべき」を先に立てず、人間として生きている片隅の世界に優しく寄り添うような映画である。「何度も二人で死のうと思いました」というお母さんの言葉は、私たち一人ひとりに問いかけられている。この映画は、それぞれの業界の「あたりまえ」に縛られがちな身体をほどき合う契機となり、私たちを原点へと連れ戻す。手を止めいっしょに「外」に出るからこそ見えてくる教育の原風景が（「ネガ」の側面も切り捨てないで）映り込んでいる。鑑賞して語り合って「〈いのち〉の時間」を思い出すことから始めてみてはどうだろうか。